

大口預金金利の自由化

田中 修

はじめに

6月2日、人民銀行は「大口預金管理暫定弁法」を公表し、大口預金金利の自由化を進めることを明らかにした。本稿では、発表の概要とメディアの論調を紹介する。

1. 人民銀行の発表概要

(1) 発行者となる金融機関

政策性銀行、商業銀行、農村合作金融機関、及び人民銀行が認可したその他金融機関である。発行者が大口預金を発行するときは、毎年最初の発行前に、人民銀行に対して年度発行計画を届け出なければならない。発行者が年度発行計画を調整する必要があるときは、人民銀行に再度届け出なければならない。

(2) 投資家

個人、非金融企業、機関団体、人民銀行が認可したその他単位である。保険会社・社会保障基金も投資家となることができる。

投資家となるには、次の条件を具備しなければならない。

- ①全国的な市場で、金利を自律的なメカニズムで決定する構成員であること。
- ②既にその機関において、大口預金管理弁法を制定し、大口預金の管理システムを確立していること。
- ③人民銀行が要求するその他条件を満たすこと。

(3) 大口預金の商品形式

①最低額

個人投資家向けは、30万元を下回らないこと。機関投資家向けは、1000万元を下回らないこと。大口預金は一般預金なので、預金保険の保障範囲に含まれる。

②期間

1ヵ月、3ヵ月、6ヵ月、9ヵ月、1年、18ヵ月、2年、3年、5年の9種類。

③発行金利

市場化方式によって確定する。固定金利の預金については、イールドカーブによって計算。変動金利の預金については、上海短期金融市場金利（Shibor）を基準にして計算。

④譲渡等

発行者は、発行条項に、譲渡・期限前の引き出しが認められるかどうか、利息計算のルールを明確にしておかなければならない。譲渡の範囲は、非金融機関投資家に限られる。大口預金は担保に用いてもよい。

2. メディアの反応

(1) 経済参考報 2015年6月8日

①ミクロの面

大口預金の発行は、元本保証型理財商品の代替効果を生み出す可能性がある。この代替程度は、両者の類似度によって決まり、現行の理財商品市場の構造を変える可能性がある。

②収益面

2014年末、元本保証型銀行理財商品の資金残高は3.26兆元であり、全市場の21.69%を占めている。収益保証型銀行理財商品の資金残高は1.67兆元であり、全市場の11.14%を占めている。

両者の市場シェアの合計は、32.83%である。大口預金の発行は、この部分の市場に対して、クラウドディングアウト効果を生み出す可能性があり、元本保証型銀行理財商品の発行は深刻な影響を受ける可能性がある。

③リスク面

大口預金は、基本的にリスクのない収益商品と見なしてよい。これに対して、銀行理財商品のリスクは5つのランクに分かれている。1級（リスク低）、2級（中低）、3級（中）、4級（中高）、5級（高）である。1級の低リスク型は、この商品の期待収益が実現できない蓋然性は極めて低く、大口預金のリスクに類似している。昨年、この種の銀行理財商品が全銀行理財商品に占める市場シェアは27.63%である。

初期においては、大口預金は低リスク銀行理財商品に投資している人々の一部を吸収するが、将来は、金利の市場化が不断に推進されるに伴い、大口預金のハードルは不断に下がり、大口預金は低リスク銀行理財商品の絶対シェアを占拠してしまうだろう。そして、銀行理財商品市場では、最終的に元本非保証・変動型商品を主要な商品とする市場が形成され、リスクを基準とした市場区分が形成されるものと期待される。

(2) 新華網北京電 2015年6月11日

全国インターバンク同業取引センターが11日に発表した情報によると、工商銀行・農業銀行・中国銀行・建設銀行・交通銀行・浦東開発銀行・中信銀行・招商銀行・興業銀行等の9行は、6月15日に初めて大口預金を発行する。既に詳しい情報を公開した数行をみると、商品の金利は最高で同期間の基準金利の40%上乗せとなっている。

北京金融デリバティブ商品研究院の趙慶明チーフマクロ研究員は、次のように語っている。

「これまでの大口預金への期待と比べると、最高金利を基準金利の1.4倍で定めるのは、やや低い。このような収益は、信託・ファンド・銀行理財商品と比べて、競争力は十分ではない。ただし利点は、元本・利息が保証され、引き出しもでき、担保にもできることであり、かなり大きな金額の遊休資金があり、どのようなリスクも望まない投資家に比較的適合している」。

工商銀行の発行計画によれば、個人の顧客に対する大口預金は、6ヵ月と1年の2種類であり、発行金利は中央銀行預金基準金利の1.3-1.4倍、購入金額は30万元からとなり、期限が到来したとき一度に元利を償還する。期限前に引き出してもよいし、担保に入れてもよい。建設銀行の大口預金は、同時に個人と企業向けに発行し、金利は基準の1.4倍である。

これに比べて、一部の都市商業銀行は、中央銀行が利下げを行って以来、既に預金金利を1.4倍に上乘せし、1万元から預金を受け付けていた。理財商品の収益は、もっと高かった。たとえば、ある都市商業銀行が現在発行している期間275日のインターバンク収益保証型理財商品は、5万元から投資でき、収益率は5.1%である。一方、現在1年物の大口預金金利の最高は、3.1%である。

ある国有大銀行の関係者によれば、初めての大口預金の金利が高くないのは、主としてそれが期限前の引き出しの条項を含んでおり、定期預金のように半年~1年間資金をしばりつけておけないからである。このほか、関係部門は、資金調達コストが推し上げられることを心配し、リスクゼロである預金金利の引下げを大口預金誘導することを希望している。いく度もの利下げの後、銀行の利鞘は収縮し、利潤の伸びはプレッシャーを受けており、くわえてインターネット金融が競争を激化させ、銀行負債のコストは既にかなり高くなっているのである。

社会科学院金融研究所銀行研究室の曾剛主任は、次のように述べている。

「理財市場が繁栄し、株式市場が活発化していることは、預金の流出をかなり強めている。大口預金という新商品が出て、短期市場の需給が非常に楽観視できるとは限らない。とはいえ、まだ開始したばかりで、銀行は試行段階にあり、金利を一気に高く決めることは不可能である。のちに、市場の反応状況を踏まえて、金利が引き上げられる可能性がある。根本的に言うと、大口預金は市場化されたものであり、完全に市場の需給で決まるのである」。

あるいは、最初の大口預金であったため、本来であれば競争し、金利でもある程度差があった9行が、今回は「歩調」をかなり一致させたのかもしれない。既に商品の詳細を公表している工商銀行・農業銀行・建設銀行・中信銀行の発行金利は、1年物商品でわずかに違いがあるだけであり、ほかの期間はいずれも基準金利の1.4倍である。このほか、品目において、農業銀行と中信銀行は、その他の2行と比べより豊富である。

趙慶明は次のように述べている。

「大口預金の核心は、市場による金利決定であり、市場化のためには銀行が自身の信用水準と経営状況に基づいて、市場で異なる金利を決定しなければならない。大小銀行の資金需要は同じではないし、位置づけも異なる。将来、大口預金が推進されるに伴い、投資家により多角的な商品が提供されるものと信じている」。

「大口預金管理暫定弁法」に基づき、全国インターバンク同業取引センターが、中央銀行から授権された大口預金業務の発行・取引・情報公開の第三者プラットフォームとなる。

(3) 広州日報 2015 年 6 月 11 日

昨日、工商銀行が 6 月 15 日に個人向けの譲渡可能な 2 種類の大口預金の発売を開始するとの情報があった。うち、6 ヶ月物の金利は 2.87%、1 年物の金利は 3.15%であり、いずれも基準金利の 40%上乗せである。農業銀行・中国銀行も、月内に大口預金を発売する準備を進めており、主として 1 年物の短期商品に集中しており、金利は預金基準金利の 1.4～1.5 倍にコントロールされているようである。

上述の銀行は、官庁ルートで大口預金について公告しているわけではないが、業界内では普遍的に大口預金の 1 年物平均金利は約 4.1～4.2%と予想されているため、もし発売される大口預金金利がこの水準より低ければ、投資家の吸引力が大きく減殺されると市場は認識するだろう。

このほか、大口預金の個人投資のハードルは 30 万元であり、預金を流出させるのは主としてハイレベルの顧客となり、この顧客数は相対的にかなり少ないため、短期的には銀行理財商品からの資金流出には限りがある。

(6 月 16 日記)